

私の視点

元蔵相・日中友好砂漠緑化協会会長

武村 正義



10月初め、私が会長を務める日中友好砂漠緑化協会の活動の一環で、中国の内蒙古の砂漠に植林に行った。大興安嶺の南に広がるホルチン砂漠で日本から参加した約50人の仲間と汗を流した。

スコップで荒れ地に50センチぐらいの穴を掘る。あり地獄のように砂が崩れてくる。反対になかなか掘れない硬い土地もある。ひとりあたり10本、計500本の

opinion news project

樟子松を植え、バケツリで1本あたり2杯の水をかけ、最後に土で地固めをして作業を終えた。ささやかな植樹である。

「自己満足だよ」という人がいるかもしれない。「そんなことぐらいで砂漠化は止まらない」と批判する人もいるだろう。でも、

く、この50年で急速に砂漠が広がっている。都市化の進展や過開墾、過放牧が背景にあるといわれる。

私が初めて中国まで植林に出かけたのは96年だった。大蔵大臣をしていた95年ごろ中国で長年植林活動をしてきた非政府組織(NGO)代表の話を聞き、中

回、ほぼ2年ぶりに4回目の植林を実現させた。

この度の植林活動で最も心に残ったのは、ホルチン砂漠の町の責任者が「この3年間で町全体に占める森林の比率を6%から8・6%に引き上げるのに成功した」と胸を張った姿だ。環境意識の高まりを感じ

こうした機運を広げていきたい。そのために、日本ができることをひとつ提案したい。

日本の中国へのODA(政府の途上国援助)を植林支援など環境分野の一点に絞ってはどうか。有償ではあるが利子はとらず元本償還だけを求める円借款の

◆中国の植林 無利子の円借款で支援を

何かしなければ事態は悪くなる一方なのだ。

中国で森林破壊と砂漠化が深刻になっている。現在、全土で砂漠が占める比率は27・9%。毎年0・1%にあたる1万4000平方

米[※]ずつ増えている。逆に森林率は17・5%まで減った。内蒙古も例外ではな

国の森林を巡る状況に危機感を抱いたのがきっかけだ。

約30年の政治人生で、「水と緑」の問題に関心を抱き続けたということもあり、以来、公務の合間をぬって折に触れて中国に足を延ばした。病氣や政界引退でしばらく休んでいたが今

朝日新聞社がこの8月から9月にかけて日中両国で実施した世論調査でも、環境問題に「大いに関心がある」と答えた人が、中国で6割いた。日本のほぼ倍に達しており、中国で環境が人々の視野に入ってきたことをうかがわせる。

形が望ましい。無償のODAでもよいのだが、現在の日本の財政状況では難しい。日本では実施されていない無利子借款という「第3の道」なら、中国も導入しやすいし、日本の財政にとっても現実的ではないか。

中国ではいま、日本から

約30のチームが植林活動をしている。市民団体、女性グループ、労働組合、仏教団体など顔ぶれも多彩だ。ホルチン砂漠にはここ数年、東京のある私立高校生が卒業旅行で木を植えにきている。中国までは来られなくても、資金カンパで協力された方もある。そうした金で中国人が雇われ、下草刈りや羊を防ぐための柵づくりも進んでいた。

日本と中国は海、空でつながっている。偏西風は黄砂も酸性雨も運んでくる。隣国の環境問題はひとつではない。国は国でできることをやる。個人もできる範囲で行動を起こしてほしい。地球環境を守るために、ともども小さな一歩を踏み出す。それは、日中友好に